

心
の
絆

子どもに育てられて

新卒三年目に山の小さな学校で一年担任となった。その時に忘れられないA児とB児に出会った。A児は背が低く痩せていて、常に口元からよだれを垂らしていた。長い時間席に着いていられず、よく授業中トイレに行く。トイレに行くとなかなか帰って来ないので探しに行くと、池の中を棒で突いたり、砂遊びをしたりしていた。経験と指導力のない私は、こうした失敗を何度も繰り返していたが、トイレは休み時間に必ず私が連れて行くことにした。そのうち、女の子が手をつないで連れて行くお手伝いをしてくれるようになった。女の子は得意げにお姉さん振りを発揮してくれた。就学前の教育を受けていなかったA児は、自分の名前も読むことができなかった。集団生活は初めての経験であり、学習や行動は一年生には全くついていくことはできなかった。その上、思うように自分の言いたいことが表現できなかった。でも、幸いなことに、言われたことは素直に聞いてくれた。そこで、床に「Aちゃんのお家」と言って、チョークで大きなマルを書いてあげると、その中で積み木をしたり、粘土をしたりして過ごせるようになった。

大変だったのはB児だった。友達ともめると、感情を抑えきれずに、物は投げる、誰彼かまわずに体当たりする状態だった。なかでもすごかったのは給食を投げ飛ばし、窓から飛び降り、花壇の中をはいずり回ったことである。注意すると大声を出し、鉛筆を握りしめ、自分の頭に何度も突き刺した。その頃は特別支援教育も広まっていなかったが、今言うとう自傷行為のようなものであった。その上、整理整頓はできないが、鉛筆一本でもなくなると、それにこだわり、出てくるまでは大騒ぎになった。そこで、家庭訪問時にそのことを母親に話した。その

後も、何度か学校の出来事を家庭に連絡した。するとB児は必ずといっていいほど荒れたので、あまり連絡をしないことにした。その方がB児も落ち着いてきた。

クラスの子どもたちは初めのうちはびくりしていたが、こうしたことが繰り返されるうちに、どうすればB児が穏やかに過ごせるかを学んでいた。一年生だからもつと担任に甘えたいののに、自分のやりたいことを我慢して教師である私を助けてくれた。半年も過ぎる頃には「Bちゃんルール」がクラスの中にできあがっていた。そのルールには「できるだけ競争を避けること。興奮してきたら刺激するようなことは絶対に言わないこと。」等があった。幼稚園に在籍していてもB児はほとんど欠席していたので、集団生活は初めてのようなものであった。

しかし、新しい環境にも慣れ、少しずつ落ち着いて学習するようになってきた。時々興奮して感情的になっても、私が身体全体で抱きしめてあげると怒りが治まり、すうっと力が抜けて落ち着いてくるようになった。B児は理解力が高く、学習はよくでき愛らしさもあったので、こんなB児の良さを認めるかのように、クラスの子どもたちとはとてもよく面倒を見てくれ、B児を遊びの仲間に入れてくれた。子どもたちみんながB児を温かく見守ってくれた。

この年ほど子供たちに助けられたことはなかった。また、ありがたいことに未熟な担任の私でも、保護者からの苦情は全くなかった。A児・B児の指導は大変であったが、学ぶものが多かった。この時の体験はその後の指導に生かすことができた。また、この貴重な体験で、私は教師として大きく成長できたと思う。困難は自分を磨くチャンスでもあると感じたのもこの時であった。

子どもから学ぶ

今思うに、この三十数年間で、社会は著しく変化し続けている。身近なところで、白黒テレビからカラーテレビへ、固定電話が一家に一台普及するや否や、携帯電話が登場し、一人一台の様相となつている。自家用車の普及も同様である。待たなくても品物が手に入る自動販売機、四六時中営業しているコンビニエンスストアもいたるところにあり、便利になつている。

一方で、利用者が少なくなると公衆電話は撤去され、バス・電車等公共機関の乗り物も廃止されてしまう。あまり人と関わりをもたなくても、物が手に入り、時間を気にせず移動もできる。世の中、確かに快適で便利になつている。戦後の貧しい時代に育った者からすれば、今は夢のようなである。便利な環境で育った人は当たり前であり、今親となつている世代が正しくそうである。

振り返ってみると、いろいろな人と出会つてきた。ただ、今の子ども昔の子ども、言葉だけでなく「全身全霊」で表現したり、訴えたりしている。

昭和四十年代後半から、児童生徒にかかる問題が増えてきたような気がする。

昭和五十年頃、家庭の事情で他校から転入してきた子（小四女子）に出会った。二三日したら登校を渋るようになった。朝になると「お腹が痛い」「頭が痛い」と訴え、十時頃になると元気になる。児童との人間関係をつくるため、家庭訪問をし、おはじきやゲームをして遊んだ。

それ以前から、学校教育相談や心理学に関心を持っていたので、研修会等には積極的に参加していた。特に関心を高めたきっかけは、アメリカの心理学者の書いた「ロジャーズ全集」（全二十三巻）に出会ったことにある。早速買い求め、読みふけたような気がする。その中で、

特に録音記録は何回も読み直しカウンセリング技術を高めようとした。また、学校教育相談研究会で、筑波大教授の真仁田昭先生と親しく話す機会が何度かあったのも大きな励みとなった。

その子は、一学期後半から保健室登校ができ、教室まで物を届けることができるようになった。二期の始業式の日、表情にゆとりが見られたので「教室へ行こうか！」と誘ったら、「うん」とにやかな様子で返事をし、担任の後について教室に入った。クラスの子も、今まで一緒に生活していたかのように、何のわだかまりもなく受け入れてくれた。子どもたちに助けられた一瞬である。それからは「どうして日曜日は学校が休みなの？」と言い、止まっていた時間を取り戻すかのように活発に行動し、学校生活を満喫していた。体重も増え、明るく元気な子に成長した。

昭和六十年頃に出会った男の子の話。たまたま小学三年生のころ病氣になった時、両親が仕事を休んで一日中そばにいて看病してくれた。そのことが大変うれしかったらしく、それから登校を渋る日が目立つようになった。その子は「病氣になれば親に甘えられると思った。」と、卒業間際にこっそりと話してくれた。

教師自身が、いろいろな体験をすればするほど、人間性が豊かになり、心にゆとりが生まれ、温かみのある優しい眼差しで子どもや保護者と接することができる。また、誇りをもって子どもと接し、時には毅然とした態度で指導し、常に「子どもから学ぼうとする」態度を大切にすればするほど、信頼度が高まっていくと思う。

子どもは、いろいろなことを気付かせてくれる。

私の定期預金

私には、ボロボロになった三十冊の「生徒名簿」がある。年度毎に発行されるが、いつのまにか意識的に収集する癖がついた。この名簿を開くと、タイムマシンのように、その時代に逆戻りする。楽しかったこと……嬉しかったこと……悲しかったこと……苦しかったこと……。そして、あの子、この子……。生徒たちの顔と共に、懐かしい思い出に浸る名簿。唯一の宝物である。

「先生！正社員になりました。」と、四月五日に古巣に戻った中学校に、N男が誇らしげに、飛び込んできた。私は思わず「なに！平日なのに、なにが正社員だど？」

思い起こせば、N男は中学時代、生活態度もあまりよくなく、飽きやすく、担任は手を焼いていた生徒である。俗に言う問題児であった。が、弱い者いじめはせず、男気があり、どこことなく魅力的な男であった。ある時、廊下ですれ違いざまに「N男、二十歳になったときが勝負。楽しみにしているよ。」とひと声かけ、送り出した記憶がある。

その後、N男はA高に進学した。私も転勤したが、定期的に中学校訪問してくれるA高校の先生に、N男の入学後の様子が気になり、動向を尋ねると、遅刻、無断欠席、校則違反……相変わらずの生活態度とのことである。そのたびに、私の名刺の裏面に、「自覚せよ。」「約束は……。」「遊びに來い。」

「ふざけるな！」「頑張つて……。」「まわりを見ろ！」「必ず卒業しろ。」「もう少しで……。」「と記し、渡すのが習慣になっていたことを思い出した。

それがなんと今日、『有給休暇』を使い、手には今まで渡した、数枚の私の名刺を大切に持

つて……。まさに教師冥利に尽きるとは、このことである。

それというのも教師になりたての頃、せっかく先生になったのだから、「いつでも、どこでも、誰にでも、三年間に一度は、声をかけよう。」と、心に誓ったものだ。それがやっと、実を結ぼうとしているからだ。そこで私は、

一、ひと言葉の重みを

二、優しくと、厳しさの両面を

三、叱ることは大切。アフターケアはもつと大切

四、八方ふさがりをしない

五、ときには、寝食を共に

を、心にかけてきた。

そして、学校は生徒が主人公。「おおらかにして、厳しく」をモットーに、アンテナを高く、足で稼ぎ、いつでも「生徒」を信じる心で接してきた。

今もって残念なのは、平成元年から七年まで、行政に出向し、ポツカリと穴が空いてしまっていることだ。

これからまた、卒業生が訪れたときは、この古い名簿を取り出して、本人はもとより、同級生の動向を聞いて、一喜一憂するも、また楽し。ただ今の預金高は六千四百二十七円（名）也。これが私の定期預金であり、貴重な財産である。

学級通信を日刊で発行していたころ

昭和五十年代の後半（校内暴力や荒れる中学生という言葉が世間を騒がせたころ）、私は現任校で学級担任をしていた。当時、同学年を組んでいたA先生（私にとって良きライバル的な存在だった）の研究レポートに「一日に何人の子と関われたか」という問いかけがあり、その言葉に私の中で何かが弾けて、それまでの生徒との関わり方が「一喝」された思いがしたのを覚えている。

そのころである。四月の始業式の日、そのA氏とお互い同時に「やりますか。」と作成してきた原稿を見せ合い、その日から学級通信を日刊で発行し始めた。二クラス分を合わせてB4一枚に印刷し、B5片面刷りで発行する。なら毎日続くだろう。出すなら毎日。あくまで「日刊」にこだわりたい。

生徒たちとの日々の足跡を記しながらクラスの結束を促し、やがて「学級世論」を形成する。それを基本方針にした。その日のできごとや行事、授業、係活動、仲間とのこと、また家庭学習や生活態度など諸々のこと（その時々のはたはた）を普段の話し言葉で記していった。一人一人をよく見る。意識して一人一人と関わっていく。そうしないと中身のある記事は書けない。ワープロが登場する少し前の何ごとも手書きの時代で、製図用ペン（0.5mm～0.1mm）でファックス用原稿原紙の枠目を埋めていく。殆どが帰宅後の作業となる。したがって毎晩遅くまで書齋にこもらなくてはならなかった。時には朝食のパンをくわえながら食卓で原稿を書いた。でも楽しくて仕方なかった。通信を読む生徒たちの：ウンウンとうなずいて、エーつとどよめいて、時々クスクス笑って：が楽しみで、それを思い浮かべてわくわくしながら書いていた。

修学旅行でも発行した。バスの中で、旅館で、みんなびっくりして「スゲエ、どこで書いたんだ先生は。」（事前に三日分作成して持っていた。）また長期出張の時は、例えば筑波から毎日ハガキの通信を投函した。例えば海外で書きためたものを帰国後まとめて印刷、配布した。百号や二百号を達成した時は、教室中が「わっしょい！」の気分になった。

とはいっても、間に合わなくて慌てて帰りの学活に食い込んで印刷していたこともあって、そんな時には「学級通信を出すよりも、一分でも長く生徒たちに関わることの方が教師の本筋ではないか。」（もつともである）と、校長先生からきつく叱られた苦い経験も何度かあった。

結局、この学校を転勤するまで五年（A氏とは三年）続けた。その間、保護者の方々から『先生からの愛の贈りもの』と表紙を付けて大切に綴じています。』とか「毎日子どもが帰るのを楽しみに待っています。子どもが見せない時は、通信はどうしたのって催促しています。」など、うれしい言葉が次々届いた。そのころは「先生が担任でよかった」という生徒たちの声が聞きたくて、その顔が見たくての一心だったような気がする。私の受け持ったクラスには非行傾向の子も不登校の生徒もいたし、仲間割れやいじめもあった。しかし生徒たちは皆、一体感や所属感を、またやっていいこと悪いことの価値観が染み込んだ雰囲気（「学級世論」というべきもの）をクラスに感じていたことと思う。

学級通信を日刊で発行して、何より生徒や保護者との距離が縮まっていくのを感じた。そして「全体に厳しく、個には優しく」という生徒との関わり方、「生徒におもねず叱って諭せること、好かれるよりも尊敬されること」が大事であるという教師としての在り方を学んだのもこのころだったと思う。

子どもは担任を通り過ぎていく存在

教員になりたてのころ、「所詮子どもは、担任を通り過ぎていく存在だよ。」と先輩教師から言われた。そんなものなんだと妙に納得してしまっていた。でも今はそれは違うとはっきり言える。新卒で小学校に赴任し五年が過ぎ、その後の三年間は四・五・六年と忘れられない子どもたちを持ち上がった。この子どもたちと共に私自身が成長できたとは今は感謝の気持ちでいっぱいである。

昭和五十二年、小学校学習指導要領が改訂になり、社会科では特に歴史分野において今までの通史的な扱いは中学校に委ね、その時代の代表的な人物や文化遺産を中心に時代の特色をつかませるというような扱いに変わった。小学校の社会科の教員がよく使った言葉、「歴史を通史ではなく団子（中心となるもの）と串（年表）の関係で学習する」というものである。それは今でも小学校歴史学習の主流になっている。そんな中、勤務校は県南社会科大会の授業研究校になり、五十三年に公開発表が決まった。わたしはこの子たちと共に、五年生の時から一年半かけて、社会科を中心に学び方を学ぶ学習に取り組んだ。提案授業の単元には明治時代を選び、幕末期と維新时期と国会開設期を一括りにし、先人が時代をどう捉え、どうしたかったか、その思いや願い、生き様に迫りながら時代を大きく捉えて学習させたいと考えた。明治期は時代を通して追究できる特定の人物を選択することは難しいとされていたが、悩んだ末あえて西郷・大久保・伊藤などの群像としてでなく、板垣退助を選んだ。学習の方法としては息の長い発言ができるようにと、筑波大や宇大附属小などの素晴らしい先輩の授業を録音してきては、学会の時間に自分たちの発言内容との違いを分析させ、個々人の技能向上に努めた。これが、私

とこの子どもたちとの結びつきの一つになった。この子どもと共に築き上げた提案授業が、私にとって今でも唯一忘れられない授業になっている。

卒業が近づいたころ、この子どもたちが、突然、卒業式がすんだらみなでどこかに行こうと言い出した。そんなことは許されるはずがないと高をくくっていたが、子どもたちは校長や保護者の了解を取り、計画も自分たちでやると言ってきた。わたしは校長がよく了解してくれたなと感謝しながらも、当時溪流釣りで行った、日光市の「寂光の滝」を目的地に選んだ。当日は、先頭を私が、しんがりを家内が務めた。途中神橋のところで「日光の恩人」といわれた板垣退助の像を見せ、心に残る卒業旅行となった。中学校一年生のときには栃木市内の錦着山まで、中二の終わりには、電車を利用して湯島天神まで、そして、高校二年生の時には家内の実家近くの今西市（現日光市）の鬼怒川河川敷グラウンドを借りて、一泊二日のキャンプを張った。全て少しずつ成長した子どもたちの計画によるものであった。

現在彼等は四十一歳になる。今では二年に一度、思い出の十一月に我が家に二十人前後の大人が集まる。家内に迷惑をかけないようにと食材や飲み物持参で遠くは横浜や福島からやってくる。五年生のとき「先生なんか大嫌い。何もわかってくれない。」と日記に書いた子が、高校三年になって兄の家庭内暴力について打ち明けてくれたときなど、彼等が成長と共に大いに悩みながら生きていることを、その折々に感じ、自分の未熟さを覚えることが多い。私だけでなく家内や息子たちも、お付き合いいただいているという気持ち強い。今では教えられ、助けられているのである。「子どもはただ通り過ぎていく存在」ではない。

出会いの中で

「お久しぶりでース。今日ねー、先生に話したいコトあつてきたんだけど……。先生いないカラまたくるね。あたしねえ、〇〇ではたらいっているんだあー、バイトの人みんないい人だよ。それぢやまた。」夏休みも終わり近く、暑さに心身共にすっかり打ちのめされかけて、久しぶりに出勤した職員室の机上に、こんな置手紙がありました。文中、文末には、ハートマークや、メールの絵文字がたくさん散りばめられていて、なんとも楽しい置手紙。思わず笑顔になり、その子思い出し、中学生の時は、いろいろあつたけれども、彼女なりに明るく生きているのではないかと、改めて子どものたくましさに感服することしきりでした。

彼女は自分の置かれた複雑な家庭状況をあつからかーんと語ってしまうことで自分を保っていました。時々彼女なりに、自分の置かれた状況の不本意さを、顔で、態度で、表して「むかつく」と言つて保健室に来ていました。そして、「あのね」と話を始めると、止まるところをしない。それを私はただひたすら「うーん、そうなんだあー。」とだけ聞いている。こういうときはあえて何も言わないで聞くことに徹することになっている。話すだけ話すと、「けど、まあいいかあー。」と言わんばかりに、自分の中で言い聞かせる時を待ち、「ああー、スッキリした。じゃ教室に行つてくる。」と今までのあの憤りは、いったいなんだつたのとあつけにとられていてる私を置き去りにして、教室に戻つていつてしまふ。

その一挙手一投足を掛け値なしで受け止めてくれる大人が居る、そのことだけで、自分の力をバネにして前を向いて生きてゆけるのだと思いました。そんな場、そして人が、保健室という場所であり、養護教諭という存在であればと思いました。

自分が特に変わつていったのは、小学校の勤務から、中学校の勤務に変わったところからでした。勤務した中学校は、まだシンナーとか喫煙が、一部の反社会的な生徒に見られていました。シンナーを止めることが出来ずにいる男子生徒が、保健室へ来て、施設での暮らしを語り、「親に見捨てられたと思つていたし、寂しかったし、こんなことでもして目立つしかなかったし……。泣きながら訴える様は、本当に「幼子」のようでした。自分の思いを言葉ではなく、泣くという方法で訴えてくる中学生、私にとっては驚きでした。

不登校の生徒も、どうにかしよう、どうにかしてあげようと、教師である自分が迫れば迫るほど、生徒も私も生きにくくなっていくのが解りました。私は考えを改めました。教師である前に、一番身近にいる普通の大人でありたいと。

育て直しのように、中学生を背負ったり、ダンボールの家を作つて退行を手伝つてみたり……。多くの生徒との出会いの中で、自分が変わらざるを得なかったというより、子どもたちが私を変えてくれたのでした。

多面的な自己研修を積極的に受けて、価値観を多く持つとともに、転換をはかる必要性を教えてくれたのも子どもたちとの出会いだったのです。

「私は、誰かに尊重され、大切に思われている」という実感を、より多くの生徒が持てるような、そして、卒業して何度でも訪れてみたいと思えるような保健室であり、養護教諭であり続けることを願っています。

担任の力

ここ十年、毎春秋になると、我が家を訪れる教え子がいる。来るときは自宅で採れた秋の味覚の栗を必ず持つてくる。

その子の名はY子という。Y子を初めて担任したのは、昭和五十八年の四月。この年は、東京デイズニールランドがオープンし、日本海中部地震の津波で遠足の学童ら百四人が犠牲になった年でもある。私は三十五歳、教員として脂がのり、教育への情熱が真つ盛りな時だった。

Y子は母子家庭、母親は病弱である。お世辞にも楽な暮らしとはいえない。少し小太りでやさしさもあるが、それをはるかに気の強さが上回っていた。わんぱくの男の子にからかわれ、口げんかが続いているうちに、きかない女の子に育っていた。そして、いつの間にか、からかわれる対象になっていた。小学校の先生から、「少々やかいですよ。」と聞いてはいたが、案の定、トラブルには事欠かなかった。休み時間は男の子と口げんか。教室でY子が近づくところと離れる。Y子が座った椅子は誰も座らない。並ぶときは間隔を空けて整列する。あぐくの果てに、分けた給食を食べない生徒まで現れた。

四月早々、さすがに私も頭を抱えてしまった。この問題は時間がかかるとは承知しながらも、早くどうにかしなくては、という気持ちであせったことは確かである。学年主任や他の学級担任に相談し、連携をとりながら協力や支援をたくさん受けた。また、学級のまとまりの大切さや、友達との接し方について、何度も何度も学級で話し合った。時には私の生き方を交えて、人との付き合い方や関わり方についても繰り返し指導した。

Y子の話を聞き、慰めたり、言っただけ聞かせたり、自分を見つめさせたり、そんな日が続いた。

ある時は悔し涙を浮かべ、ある時は興奮して大声を出す。でも、私と話す時はごく普通の十三歳の女の子である。時間とともに指導の手応えが少しずつ表れ、ホッとできる時間が増えた。しばらくして二人で約束した。私がY子の味方になること、つらくても学校は休まないことである。先はまだ長かった。それは私が卒業まで面倒を見ることになっていたからである。

しかし、三年間はまたたく間に過ぎた。進路について母親に相談すると「先生にお任せします。」の一言であった。Y子と話し合った結果、昼間は工場で働き、夜間に高校へ通う二部制の高校に進学した。しかし、再び試験が待っていた。全寮制であり、そこには苦手な人間関係があった。入学して一ヵ月、夜遅くY子から電話があった。早速電話に出ると、「高校をやめたい、寮はいやだ。」と泣いて言った。数分話した後、「そんなにいやなら帰って来い。」と応えた。その時は悩んだが、今は正しい判断だったと思う。その後、地元に戻ってきて結婚し、現在は幸せな生活を送っている。

昔から学校には、からかいや、ふざけっことはつきものである。大切なのは、担任が心を開いて子どもの話を聞き、言っただけ聞かせることである。百回言っただめなら、百一回言う。これが基本であり、担任の生き方や何げない言葉が子どもの心を動かすのである。さらに、子どもからの信頼は、担任の人柄と指導力がものをいう。

とは言っても、担任一人の力には限界がある。あまり背伸びをせず、常に周囲の協力や支援を受けることを忘れてはならない。

今年の秋も、教え子に会えることを楽しみにしている。